
ファンタジーな 1 0 0 のお題

霧生 漣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジーな100のお題

【Nコード】

N4858F

【作者名】

霧生 漣

【あらすじ】

『ファンタジーな100のお題』を順不同、短編読みきり形式で消化していきます。目指せ、週1更新……は無理なのでせめて月一！！

でもやっぱりそれも無理そうなので、全クリア目指します。

予定期間としては5〜10年くらいでw

(既に1/3過ぎてるとかは気にしない！)

自サイトよりの転載となっています。

更新は同時です。
(多分こっちのほうが早い)

000：開始にあたって&お題一覧（前書き）

こういう形で小説投稿サイトを利用する人ってあまりいないかもしれませんが…。

<http://www.geocities.jp/egggs/100txt/>より、「ファンタジーな100のお題」をお借りし、文章力UPの為の課題として挑戦したいと思います。

順不同。

短編読みきり。

目指せ、週1更新！！

たとえ無事週1（絶対無理w）更新したとしても、お題終了まで2年弱かかる予定です。

5～6年をめどに終了出来たらいいなと思っています。

気の長い話ですが、どうぞお付き合い下さい。

お題消化にあたっての課題。

・1題につき1話厳守。（1話で2題以上の消化は何れかが無効）

・出来る限り1話読みきりで。

（他の話を読んでないと分からないようなもの、1題で4回以上に亘る連載は不可）

・月1回更新。

・話が題に沿ったものであること。（これは当然かw）

以上を目標に、お題をクリアしていきたいと思います。

000：開始にあたって&お題一覧

以下『ファンタジーな100のお題』一覧。

001：時計

002：荒れた大地

003：さいごの皇帝

004：霧深い都市

005：呪い

006：切れない絆

007：ギルドマスター

008：滲んだインク

009：竜（龍）の眠り 08/11/20 了

010：夢

011：英雄

012：砂漠の水

013：南にある町（街）

014：聖杯

015：主従

016：長い夜

017：ステイグマ

018：混血

019：後継者

020：花束

021：小さな約束

022：宝石

023：絶対者

0 2 4 : 道化師	
0 2 5 : 剣	
0 2 6 : 金貨3枚	
0 2 7 : 旅の仲間	
0 2 8 : カーニバル	
0 2 9 : ペルソナ	
0 3 0 : 巡礼者達	
0 3 1 : 黒い肌	
0 3 2 : うれた果実	
0 3 3 : 牢の囚人	
0 3 4 : 契約	
0 3 5 : 復讐	
0 3 6 : しるし	
0 3 7 : 世界	
0 3 8 : 勇者と魔王	0 8 / 1 1 / 1 3
0 3 9 : 海賊の島	了
0 4 0 : 指輪	
0 4 1 : 吟遊詩人	
0 4 2 : 裏切り	
0 4 3 : 通行許可	
0 4 4 : 優しい人形	
0 4 5 : 人魚の声	
0 4 6 : 足跡	
0 4 7 : 踊る妖精	
0 4 8 : 成長する種	
0 4 9 : 戦装束	
0 5 0 : ドワーフ	

0 5 1	墓標
0 5 2	花売りの娘
0 5 3	真珠1粒
0 5 4	闘技会
0 5 5	一人旅
0 5 6	手紙
0 5 7	凍った森
0 5 8	傭兵
0 5 9	塔
0 6 0	結界
0 6 1	魔法使い
0 6 2	マント
0 6 3	荷馬車
0 6 4	遺跡
0 6 5	亡国の騎士
0 6 6	黄昏
0 6 7	歌姫
0 6 8	はるかな地
0 6 9	精霊
0 7 0	天使の翼
0 7 1	刺青
0 7 2	エルフ
0 7 3	来訪者
0 7 4	二律背反
0 7 5	王子と姫
0 7 6	聖域
0 7 7	太陽と月
0 7 8	醜い鳥

0 7 9	・	死神
0 8 0	・	自由市場
0 8 1	・	王冠
0 8 2	・	嘆きの歌
0 8 3	・	審判の日
0 8 4	・	風見鶏
0 8 5	・	故郷
0 8 6	・	賢者の石
0 8 7	・	盗賊と城
0 8 8	・	亡霊
0 8 9	・	割れた卵
0 9 0	・	自由
0 9 1	・	焚火
0 9 2	・	浮島
0 9 3	・	罪の記録
0 9 4	・	運命の（女）神
0 9 5	・	大きな樹
0 9 6	・	異人の踊り手
0 9 7	・	赤い屋根
0 9 8	・	蜘蛛の糸
0 9 9	・	「光あれ」
1 0 0	・	白い地図

000：開始にあたって&お題一覧（後書き）

のんびり更新ですが、よろしく願います。

038：勇者と魔王（前書き）

ファンタジーと言ったら、やっぱり“勇者と魔王”だね！
ということで、100のお題・第一弾は「038：勇者と魔王」で
す！！

038：勇者と魔王

「お前は何も知らぬのだ……」

暗く冷たい静謐としたその空間に、女の嘲る様な、それでいて哀れむような声が木霊した。

その玲瓏と響く木霊は男の怒声でかき消された。

「何だと!？」

だが、その言葉に答えはない。

ただ、魔王と呼ばれる美しい女は、男に語りかけるでもなくまるで独り言のように、何かを思い出すように話し始めた。

「かつて、お前と同じように、英雄と、勇者と呼ばれた者がいた。」

「そうだ、彼女がお前を一度は倒した。その命を代償として。」

魔王の言葉をさえぎり男はそう続けた。

そして、心の中だけで言葉を繋ぐ。

自分はその何代目かの後継として、志半ばにして倒れた先達の想いを受け継ぐものとして今ここにいるのだと。

そう、長い旅の中で幾度となく繰り返した想いを新たにする。

だが、その回想も女の笑い声によって打ち消された。

「ハハハ。やはり、そう伝えられているのか。

奴らも相変わらずだ。

なにも、変わってはいないのだな。」

嘲りの言葉の中に哀しみさえも垣間見えたような気がして、勇者はたじろいだ。

この場に到るまでに、何度も感じた違和感。
繰り返し繰り返し打ち消そうとしながら消える事のなかった何か。
それが、今ここで形を成そうとしている。

神殿が言う魔王と、実際に彼が、いや、彼女が行っている事の食い違い。

何かがおかしい。

だが、それが何か分らない。

けれど、その違和感こそが魔王へ刃を向ける事を躊躇わせている。
しかしそれは、一方で自己否定に他ならなかった。

この数十年、勇者と呼ばれ、人と違う時を生きることとなっても、
魔王を倒す為だけに生きてきた。
その為だけに生かされてきた。
なのに、ここで今その否を認めるのか。

ため息と共に、魔王はその美しい相貌をゆがめ苦笑いを浮かべた。
あの連中は、今も変わらないのか、と。

勇者は刀を手放した。

勇者と呼ばれるようになってから常に手放した事はなかった。
体から離してはいても、心では常に側にあった。
だが、今はもうそれを手にすることが出来なかった。

長い長い時の彼方。

もう記憶さえも定かではない。

名を捨てて、勇者として生きてきた。

全ては魔王を倒す為に。

けれど、それはこんな事のためではなかったはずだ。
自己否定？

望むところだ。

間違っていたのなら、やり直せば良い。

間違いを正す事をせず、間違いのままに貫く事は正義ではない。

俺が望んだ正義はこんなものじゃない。

己の行いが過ちであつたなら、あがな贖えば良い。

たとえ許されずとも、それ以外にするべきことはない。

剣を床石に突き立て、柄から手を離れた勇者を怪訝そうに魔王は見つめる。

勇者は刀と共に授かった重い甲冑を脱ぎ捨てると、突き立てた刀を背に冷たい大理石の床へと腰を下ろした。

もし、今までの魔王の言葉が全て演技で、もし、今殺されることになるのなら、それはそれで本望だった。

信じる事さえも、己の心情を貫く事さえも出来ぬのなら、それは最早己の望んだ生き方ではなかった。

「話せ」

彼は静かに告げた。

もう、自分は神殿に選ばれた勇者ではない。

ただの名無しだ。

魔王と話そうが、魔物と戯れようが関係ない。

勇者であつた男の真摯な目に見つめられ、魔王は薄く微笑んだ。

「お前は、今までここに来た者とは違うのだな」

その笑みはどこか自虐めいていて……。

魔王は語る。

己が、魔王と呼ばれるに至つた経緯を。

かつて、勇者と呼ばれた者がいた。

彼は神殿の信託によつて選ばれ、魔王と呼ばれる悪しきモノを倒す事を定めとされた。

彼は、人としての名を捨て、人とは違う時を生きた。

やがて、魔王の元へと辿り着き、その命と引き換えに魔王を倒したのだと。

そう、伝えられてきた。

だが、それは真実ではない。

何百年もの間、繰り返し行われてきた。

幾度も勇者は選ばれ、その度に魔王は倒された。

やがて魔王は蘇り、再び勇者は選ばれた。

魔王は語る。

伝えられない真実を。

かつて、自らも勇者と呼ばれた者であつた事を。

始まりの勇者は魔王を倒さなかった。

否、魔王など、本当は存在してはいなかった。

勇者とは強大な力の器。

長い年月を経る内にこの世界に凝った様々な思いや記憶。
それは、力となって世界を蝕んだ。

神殿の託宣は、器と言う生贄を差し出す事を求めた。
それが勇者。

勇者は力の器として選ばれた者。

大いなる力の前に差し出された生贄。

勇者として名を失い、時を失い、全てを失った。

勇者は気付けば魔王として勇者に攻め立てられていた。

勇者は魔王を倒し、全ては再び繰り返された。

幾度も幾度も。

器が古くなるたびに、新しい器が用意された。

その度に、魔王は歴代勇者の記憶を共有していった。

何十年、何百年経っただろう。

あまりに遠く、その記憶は酷く曖昧だ。

だが忘れてしまったわけではない。

歴代勇者こそが魔王の正体。

世界を救うために、世界を滅ぼさんと荒れ狂う強大な力を身に宿す器。

それが勇者。

勇者の体がもたなくなれば、また新しい勇者が選ばれた。けして真実を知らされることなく。

魔王を倒すが定めとされて。

そうして、魔王を倒した勇者は肉体を失った力に飲まれ、新たな魔王となった。

それが真実。

魔王は幾度も勇者に説得を試みた。これでは根本的な解決にはならないのだと。

だが、勇者は信じなかった。

魔王の讒言など聞く耳もたぬと。

誰もが真実を受け入れず、魔王となった。

「そう、この私も……。」

最後の呟きは微かであったが勇者の耳へと届いた。

「お前は、信じるか？」

石の床に座り、魔王の語りに耳を傾けていた男は問いには答えず、逆に尋ねた。

お前は解決の術を持っているのか、と。

その力を消す術はあるのか、と。

長いこと、答えはなかった。

魔王はゆっくりとその口を開くと告げた。

「ない。」

「私は……我等は誰一人としてその問いへの答えを持たぬ。」

「だが、何処にはあるかも知れぬ。」

私は、それを諦めたくはない。」

哀願する魔王の目に嘘はなかった。

「ならば探そう。」

男は笑って魔王に手を差し伸べた。

「俺はもう、勇者ではない。」

お前もまた魔王ではない。

そして、最早人ですらない。」

「互いに、同じ使命のために、世界のために命かけた者。名を奪われ、誰でもない者となった者たちだ。」

「共に探そう、解決の道を。」

「その身に宿る力、半分俺が受け持とう。」

俺もまた、器としての能力を持つのだろうか？」

「お前をここへ封じているのがその力だとしても、二人で分かつては出られよう。」

そして、まもなく限界が来るお前の身体も当分の間はもつことだろう。」

「……感謝する。」

魔王の手が勇者の手と重なった。

風が吹き付ける平原には二人の人影。

風に揺れる草花以外、他には何も無い。

「ふー、気分良いなあ。」

銀の髪の青年が背を伸ばす。

空高く昇る日を仰ぎ見ながら、後ろを振り返りつつ尋ねる。

「何年ぶりだ？ 外に出るのは？」

「2000年ぶり、か……。」

答えるのは癖のある黒い長髪を風になびかせた白磁の肌の女性だ。

「長かったな。」

青年は言う。

「ああ、長かった。」

女は答える。

「でも、ここからが本当の始まりだ。」

青年の言葉に女性は頷く。

「でも、先ずは二人とも、名前を決めないと。
二人とも名無しじゃ困るしな。」

青年は女性の返事も待たず、一人話し続ける。

「そうだ、あんたが俺に名をくれよ。
俺に新しい道を示したのはあんたなんだからさ」

青年が屈託なく笑う。

暗がりで見えた時は気付かなかったが、時を止められた青年の顔は日の光の下で見ると僅かに幼さが垣間見えた。

そんな青年に女も微笑み返し答える。

「ならば、そなたも私に名をくれないか？
そなたでなくば、この道はありえなかった……」

「良いぜ」

青年は笑う。

女は言う。

「ニルヴはどうだ？」

「ニルヴ？」

「古き言葉で未来と言う意味だ。」

「へえ。じゃ、あんたはリーナだ。」

「俺の故郷の言葉で希望。」

「リーナ、希望か……。」

「良い、名だな。大切にしよう。」

今度こそ、無くしてしまわないように。
奪われてしまわぬように。
ニルヴも頷く。

「さあ行こう、リーナ。ここから始まるんだ。俺たちの、新しい旅が。」

ここから、本当の旅が始まるんだ。

魔王を倒す筈の勇者が志半ばで行方知れずになって十余年後、二人の救国の英雄が現れた。
銀の騎士、黒の騎士と呼ばれた二人の名は、古き言葉で「希望」と「未来」と言った。

038：勇者と魔王（後書き）

まあ、よくある話だね、と言われてしまえばそれまでですが。

勇者と魔王が敵対しなきゃいけないなんて誰が決めたんだ。

そもそも、誰が善で悪かなんて人間に判断つくのかよ！という考えから生まれた話でした。

数年前にサイトに公開してから放置しっぱなしorz

ちよとだけ手直しして転載しました。

さて、「ファンタジーな100のお題」ストック分に追いつかれるのは何週目か！？

無事、週1更新はなるのか！？

乞うご期待w

次回更新は11/20を予定しています。

009：竜の眠り

「本当に、良いの？」

少女が尋ねる。

いや、少女のような姿をしているが、彼女は実際には歳を経た老獪な魔女だ。

いつも、外観と中味のあまりの差に彼女への悪口雑言は絶えたことはなかったが、もう、それを傍で聞くこともなくなるのだ。

「構わない」

答えるのは1000の齢を重ねた竜。

少女が詠唱すれば、この氷室は結界が解かれる日まで半永久的に外界から閉ざされる。

そう、私はここで眠るのだ。

いつか、誰かが私を必要とするその日まで。

それが、王と交わした魔法使いの契約。

そして、私に課された最後の竜としての義務。

先の言葉は逃がす事も出来るのだと暗に仄めかしていたが、それは契約違反となってしまう。

確かに彼女が今ここで逃がしてくれるなら、私はたやすく逃げ延びるだろう。

けれど、お前に会えなくなるのであれば、私にとっては幽閉も逃亡もどちらも大差ないのだと、そう告げたらこの魔女は嗤うだろうか。

ああ、もしも心残りがあるとするならば。

この深い空の青を映した瞳に、寂しそうな色を浮かべている少女の

ような魔女の事だけか。

次に目覚めた時、彼女を初めに目に出来れば、などと願うのは愚かな事だろう。

こう見えて、この小さな魔女は既にかなりの高齢だ。

外見は年をとらなかつたが。

本当に幼かつた頃から、私は彼女を知っている。

此度の戦は本当に長かつた。

100年かかつて、漸く終結した。

彼女にはこれから国の復旧と言う大仕事が待ち受けている。

だが、私はもう用済みなのだ。

戦にしか役に立たぬ身、平和な世には必要とされぬこの身を、恨めしく思うのは初めてかも知れぬ。

「グイウエルゼ？」

沈黙を破つたのは彼女だった。

それは、これから長い間呼ばれることはない私の真名。

彼女だけが呼ぶことが出来る。

もう、この声を聞くこともないのか。

永久の別れを胸に、言葉を紡ぐ。

「さようなら、マイン」

私だけが呼ぶことの出来る彼女の真名で送る。

少女の青い瞳から、静かに雫が零れ落ちた。

君も、別れを惜しんでくれるのか。
ならば、それで充分だ。

それだけで、私は永い眠りも越せるだろう。

「おやすみなさい、グイウエルゼ」

氷室の扉が閉められる。

訪れるのは、真の闇だ。

まもなく、扉も雪で覆い隠されることだろう。

ああ、冷気が満ちてくる。

懐かしい、孤独だ。

別れのそれではなかった彼女の言葉に、叶わぬことと知りながら、それでも再会の時を夢想する。

せめて、夢の中ではあの青い瞳が共にあるように。

おやすみ、マイン。

009：竜の眠り（後書き）

サイトより加筆修正し、転載。
次回、11/27更新予定。

002：荒れた大地

その日はよく晴れた日で、いつもなら必ずどこかしらで小競り合いがあったり、時には大規模戦闘があったりで、こんなにのんびりとはしていられないはずだった。

「これから、どうする…？」

「どうすつかなあ…」

途方に暮れたように呟かれた溜め息混じりの問掛けに、同じく途方に暮れたような溜め息混じりの答えが返る。

「戦が終わっても、これじゃあな…」

夕焼けに染まった赤い大地には沢山の細長い影が延びていた。

今日もまた幾つか増え、けれどこれからはもうきつと増えることのない、それらの木切れ、或いは積み重ねられた小石、或いは使い古された剣——共に戦った仲間たちの墓標を背に、ただ静かに沈みゆく太陽を見つめていた。

この日、本国から届いた一枚の紙切れ。それは長年続いていた戦争の終りを告げるものだった。

少なくとも一人の人間が生まれ、育ち、子を生し、その子が育つのを見届け、平均よりはいささか短いと言わざるを得ない一生を閉じてもまだ終わらないくらいには長く続いたその戦争も、終りばかり

は実にあっけないものだった。

国同士の間でどんなやり取りがあつたのかなど、末端の兵士には知る由もない。最も戦闘が激しかった最前線にもたらされたのは、劳いの言葉でも褒賞でもなく、ただ最早戦う理由が無くなったという事実だけ。戦争が始まつた時と同じように、終わった時もまたその理由が伝えられることはなかった。

戦禍の最中に生まれ、幼くして剣を手にした。戦場で育ち、そこでただ生きるためにだけ生き続けていた。二親など疾うに無く、帰るべき場所も無い。拾ってくれた傭兵隊もつい最近の大規模戦闘で隊長含めほとんどが戦死し、壊滅した。頼れるものなど何処にもない。

「あと半月、停戦が早ければな……」

そうすれば、今頃隊の皆と一緒に終戦を喜べたのに。

手にあるのは幼い頃から身に付けた、効率重視の的確な人の殺し方。そして何本目になるかも分からない、たいして価値もない剣が数本——しかも、そのうちの幾つかは戦場で敵とも味方ともつかない見知らぬ誰かが手にしていたものだ。そして、お情けとばかりに与えられた本の少しの報奨金。

たつたそれだけだ。

しかし、生きていくために必死で身につけたそれらも、平和とやらが訪れるらしいこれからの世の中には、まるで必要とされない代物

でしかないという。

平和と言う名の未知の世界の訪れ。

生き残ったのだと言う自覚も薄いまま、血濡れ荒れ果てた大地を前に、俺たちは途方にくれるしかなかった。

多くの者にとって、その日は長い戦いの終わった祝福べき日であった。

だが、一部の者にとっては、未知の世界の始まりを告げる困惑をもたらした日であった。

002：荒れた大地（後書き）

次回更新12/5予定。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4858f/>

ファンタジーな100のお題

2011年10月5日13時21分発行